

[展覧会随想 その1]

平常展について

私どもの大和文華館の近くには、明治28年以来の長い歴史を持つ奈良国立博物館があります。ここでは毎年秋に「正倉院展」が開かれ、奈良の秋の年中行事の一つとなっています。太平洋戦争後40数年にわたり恒例となっているこの展覧会によって、私どもが天平文化の精髄を伝える数数の宝物に接することができるのは、本当に楽しいことです。毎年この時期を心待ちにして、多くの人びとが奈良を訪れ、正倉院展の会場が大混雑するのは当然と言えます。

これに対し「正倉院展」、あるいはなんらかの特別の催しの開かれていないときに奈良国立博物館を訪ねると、場内が森閑としているのに驚かされます。ところが、この博物館は仏教美術を中心とする東洋美術の名品を多く所蔵し、また社寺や個人の寄託品も展示していますから、平常陳列もなかなか見ごたえがあります。いな、特別展よりもすぐれた文化財の並ぶ平常展も多いのです。そして、国宝の「刺繡釈迦如来説法図」(奈良時

代前期)や「地獄草紙」(平安時代後期)のような世界的名品の前に、ほとんど観客がいない状態を見るとき、私は矛盾のようなものを感じてしまうのです。

同じことは、奈良国立博物館よりもはるかに歴史が浅く、規模も小さい私たちの大和文華館の場合についても申せます。当館でも入館者の多いのは、外部からの借用品を中心とする特別展のときで、それ以外の館蔵品の展示のときは、余り多くの方がおいでになりません。そして、国宝の「寝覚物語絵巻」(平安時代後期)や李迪筆「雪中帰牧図」(南宋時代)のように、保存上長期の展示が難しい名宝が陳列されていても、それが特別展の際でない限り、やはり大和文華館を訪れて下さる方は多いとは言えないのです。

かつて、平常陳列に「寝覚物語絵巻」を陳列していたとき、わざわざこの絵巻を見るためにヨーロッパから当館に来られたある研究者が、私にこう言われたことがあります。「このようかけがえのな

い絵巻の名品が隅から隅まで展示されているというのに、どうしてそれを見ようとする観覧者が少ないのか」と。

もちろん、多くの人びとに親しまれている西洋近代絵画などとくらべると、日本をふくむ東洋の古美術品が私どもの生活から次第に遠いものとなり、それに関心を持つ人びとがへってきていることは事実です。また、美術館や博物館の場合に限らず、人びとが特別の催しの方に関心を持つのは不思議ではありませんし、放送や新聞などが、そのようなものを中心として取り上げ勝ちなものも、当然と申せましょう。また、私ども美術館員がよく批判されることですが、平常展についての私どもの広報宣伝が不足していると思われる方も多いことでしょう。

しかし、広報宣伝には費用がかかりますし、古美術品の展観などのように、じみ催しの場合、投入した費用をおぎなうほどの収入はとうてい期待できません。もちろん、新聞や放送への働きかけのように、ほとんど費用のかからない広報宣伝の手段はありますし、私どももこの方面の努力は怠りなく実行しているつもりです。しかし、新聞や放送はたとえ公共機関ではあっても、その多くが企業である以上、話題性があり、人の興味をひきやすい催しを優先的に紹介するのは仕方がないことでしょう。そこで、新聞や放送は文化財の新発見を報じ、これまでほとんど紹介されなかった美術品の並ぶ特別展は取り上げても、美術館や博物館の平常陳列を紹介することには、どうしても熱心ではないのです。

奈良国立博物館ばかりでなく、東京や京都の国立博物館を平常時に訪れると、諸外国の東洋美術愛好者が、熱愛してやまない名品が並んでいます。それと同じことは、私どもの小さな大和文華館についても言えます。しかし、世界的な名宝を選び、それを系統的に陳列し、それにわかりやすい解説札を付けても、それが特別の催しでな

いとき、決して多くの観覧者は期待できないのです。

ちなみに、フランスの19世紀の小説家スタンダールは、名作「パルムの僧侶」の末尾に、そこだけ英語で、To the happy fewと書きました。「私を理解してくれる少数の幸福な読者へ」という意味で、作家としての孤高の気概を示しているのでしょうか。

私どもの大和文華館の観客のかたがたの中には、こういう少数の幸福な人びとがいらつやいます。また、当館は開館後も、これまで所蔵品の増加に努めて参りましたので、新収品の公開を楽しみとして、しばしば当館を訪れる方も決して少ないとは言えません。また、私どもも古美術の美術館は少数の幸福な人びとのものとして、手をこまねいているわけではありません。前にも申しましたように、決して宣伝広報の努力を怠っているわけではありません。しかし、当館の場合ばかりでなく、どの美術館や博物館であっても、特別の催しの場合を除くと、観客が必ずしも増加しないのは通常の傾向でしょう。

日本にくらべて、美術館や博物館の歴史の長い欧米では、美術館や博物館の真価は、決して特別の催しを行なうことにあるのではなく、そのコレクションと平常陳列にあると考えられているようです。また、地域社会の人びとも、自分たちの美術館や博物館を愛し、大切にしようと考えています。

ところが、わが国は経済大国になっても、文化の方面では国民になお依存心が強く、マスコミが大きく取り上げるもの、あるいは多くの人びとが興味を持つものに関心が集まるようです。たとえ、すぐれた文化財が陳列されていても、平常展が多くの人びとの興味をひかないのはそのためでしょう。このような点について、私どもも努力しますので、来館者のかたがたも平常展を守り育てることに協力下さればと思っております。

(次長・成瀬不二雄)

季刊 美のたより No.107

平成6年5月19日

発行 大和文華館

ものでしょうか。制作時については、その詩稿の直前に記された「遊嵯峨経小督局旧跡」と題する詩が有力な手掛かりになります。前出の『惺窩先生文集』巻之四には、嵯峨において詠んだ四つの詩(じつは五つの詩)が連続して収録されており、すなわち「遊嵯峨」「過暹照旧跡」「過西行法師遺跡二首」「遊嵯峨。経官女小督局旧跡」(いずれも題)とあります。この「見吉田与一所画帖」もその連作の一つと考えられます。

これら一連の詩は、慶長三年(1589)の秋、惺窩が来日中の李朝

の朱子学者で刑部員外郎の姜沆(きょうこう、1567—1618)とともに、素庵吉田与一(当時二十八歳)に招かれて、嵯峨の角倉邸で数日を過ごしたときに成ったものであります。

そのとき、惺窩は、素庵の書院に題して「期遠亭」といい、姜沆は「亭之記」を作っています。この書院期遠亭において、素庵は自ら描いた画帖を二人の師に披露したのでありましょう。それは、素庵の若き日のもっとも充実した楽しいひとときであったのではないのでしょうか。(林進)